

平成 30 年度 (2018 年度)
事業報告書付属明細

自 平成 30 (2018) 年 4 月 1 日
至 平成 31 (2019) 年 3 月 31 日

【公1】環境保全事業

事業名	琵琶湖周辺域における地域の生物多様性保全モデルの構築
事業地	日本国内（滋賀県東近江市）
活動内容詳細	
<p>2018年4月1日から2019年3月31日に実施した活動について報告する。</p> <p>1) 環境保全や生物多様性を守るための農業の普及</p> <p>(a) 無農薬・無化学肥料による農作物栽培と販売の実施</p> <p>本活動では、昨年度に引き続きプロバイオティクス農法を用いた無農薬・無化学肥料による米や野菜、果物の有機栽培を実践し、有機栽培作物として付加価値を付けた農作物の販売を行い、農家の競争力の向上を図ることを目的としている。</p> <p>本年度は、これまでの有機農業の実践経験を活かし、YM堆肥を用いたプロバイオティクス環境農法を実践した。収穫した有機メロンは、ひと玉のサイズが大きく果肉も甘いことから、消費者からの評価が良かった。しかしながら、化学薬剤や農薬を使用していないことからネコブ病が発生してしまい、収穫を直前に控えた有機メロンの生育が止まり枯死してしまう株が生じた。</p> <p>加えて、2018年9月に近畿地方を襲った台風21号により、有機栽培を行っていたビニールハウスが損壊する被害が発生した。そのため、このビニールハウスで収穫を控えていた有機トマトの多くが身割れを起こしたほか、栽培を計画していた有機イチゴの作付けも見送る事態となった。現在各方面と調整し、ビニールハウスの復旧に向けて対応を進めている。</p> <p>(b) 有機養鶏の実践、生産物の販売</p> <p>本活動では、滋賀県の地鶏「近江しゃも」の有機養鶏の実践と生産物販売を支援することにより、生産者の養鶏技術の向上と販路拡大を図り生産者の所得向上と地場産業の振興を目指している。</p> <p>2018年6月、8月、12月、2019年2月にそれぞれ200羽、合計800羽の「近江しゃも」の雛を搬入した。飼料には、みのり農園で栽培した有機米の揺り子（屑米）や糠の他に、ミネラルが多い飼料を与えた。生後すぐに打つワクチンのみで、ワクチンや薬はその後一切使っていない。有機栽培した自家製米を飼料に用いることにより、安心安全な有機養鶏の実践につながった。また、昨年度からの学びを活かし、雛の時の飼育温度や湿度管理に工夫を重ねた。その結果、本年度の養鶏において、病気により死んだ鶏はいなかった。そこで、鶏舎内にブルーダー（暖房用ヒーター）を導入し、雛が暖を取るために集積する癖を防ぐことができるようになり、圧死を減少させることができた。今年は、3羽しか雛は死んでおらず、やっと採算が取れるようになった。</p> <p>出荷した近江しゃもは、肉質がみずみずしく、かつしっかりしていることから卸先店舗や消費者から評価が高く、将来の市場拡大に向けた商品価値の高い鶏肉の生産技術が着実に定着しつつあることが認められた。</p> <p>2) これからの農業を支える人材育成</p> <p>(c) 有機農業研修のための実践圃場の整備・研修員受け入れ</p> <p>本活動では、有機農業の研修や普及を行う有機圃場の整備を行い、農業に関心を持つ国内外の市民や研修員を招いて有機農業の実践を通じた将来の農業人材の育成機会の提供を図った。</p>	

2018年5月には、みのり農園の有機稲作を実践する田んぼにて田植えイベントを行った。カメルーンやインドネシアなど10カ国の途上国出身の留学生をはじめ、京都や滋賀、大阪在住の市民や大学生を含めた29名が、手作業での田植えを体験した。稲の苗を1束ずつ並べて手植えし、参加者がそろって昼食を食べるなど、農村地域で行われていた日本の伝統的な田植え方法を体験することで、留学生だけではなく日本人参加者にとっても日本型農業の原点を振り返る機会を提供できた。また、協力農家や専門家から有機農業の実践にかける思いや地域の自然環境保護と有機農業の関係について説明してもらい、日本における持続可能な農業の実践事例の紹介を行った。

10月には、田植えを行った同じ田んぼにて稲刈りイベントを開催した。イベントには南アフリカやインドなどから関西圏の大学院に留学している学生や、国際協力や農業に関心のある京都や滋賀の大学生、市民の方総勢34名が参加し、鎌を使った昔ながらの日本的稲刈りを体験した。農業専門家から鋸鎌を使った刈り取り方法のレクチャーを受けた参加者は、一枚の田んぼに豊かに実った有機米の稲刈りを行った。また、自生する竹を使った稲束を組み、刈り取った稲のはさがけを行う頃には、参加者同士で協力し合い、作業を進めていく姿も見ることができた。

(d) 有機農業の技術や知識を普及するためのネットワークの構築

有機農業技術や肥料の開発と販売を行う「大和肥料株式会社」と新たな関係構築を行い、有機農業の実践に不可欠な肥料の使用方法や効果などについて意見交換を行った。また、田植えイベントや稲刈りイベントに参加した途上国からの留学生が、日本の稲作農家が行う収穫後の米の乾燥方法や、籾摺作業や屑米や被害粒の除去を行う調整工程、精米技術に関して、みのり農園のスタッフらと積極的に情報交換を行う姿が見られた。

有機農業の実践、地域の環境保全が地域住民の生活の持続可能なものにする。食の安全や環境保全など公益の増進と、有機栽培というブランディングによる農家の利益向上が両立する農業モデルの普及に不可欠な、市民の共感や理解を得ることが出来た。

3) 環境保全・生物多様性保全の促進

(e) 生きものや土壌などのデータ採取による生物多様性の調査

本活動では、有機農業を実践する水田にて生きもの調査を行うことにより、有機農業がもたらす水田生態系への影響を観察した。また、市民参加型の環境調査の形態にすることで、参加した市民への生物多様性保全意識の涵養を図った。

2018年8月に実施した生きもの観察会では、京都や滋賀を中心に小学生と保護者計27名が参加して田んぼの生きもの採取と観察を行った。観察会では、生物学を専門にする琵琶湖博物館の大塚泰介学芸員の指導の下、有機稲作を実践する田んぼ（同田植えイベントや稲刈りイベント実施場所）を会場に、田んぼでの生きもの採取と顕微鏡を用いた微生物の観察を実施した。生きもの観察では、環境省レッドデータブックにおける絶滅危惧IB類のナゴヤダルマガエルの生息を多数確認したほか、カゲロウやゲンゴロウなどの昆虫類7種、ギンヤンマやキアゲハなど陸上昆虫10種、オカメミジンコやヒメウズムシなど微生物7種、フシナシミドロなどの藻類など25種を超える田んぼの生きものの生息を確認することができた。この生きもの観察会を通して、参加者は田んぼの生きものに実際に触れながら、生物多様性保全に対する有機農業の役割や人間の生活と自然環境の関係について伝えることができた。

【5】今後の展望・課題

1) 環境保全や生物多様性を守るための農業の普及

(a) 無農薬・無化学肥料による農作物栽培と販売の実施

化学合成農薬や化学肥料、化学合成土壌改良剤などを使用する慣行栽培では、栽培技術や薬品の使用基準などが整備されている。しかし、有機農業においては特別なマニュアルがなく、同じ栽培方法や肥料を使用したとしても一年一年が必ず成功するとは限らない。3年間の活動を通して、有機農業は化学肥料や農薬を使わないことから農作業の手間暇が多くかかり、また、大量生産が難しい栽培方法であるが、その反面、安心安全な農作物の栽培が成功した時の喜びはかえがたいものがあると学ぶことができた。本事業での学びを活かし、今後はできる限り多くの有機作物の栽培を増やしていく予定である。

(b) 有機養鶏の実践、生産物の販売

本3ヵ年事業にて開始した有機養鶏事業であるが、現在は年間を通じた安定的な生産数の維持を達成することが求められている。みのり農園は、本事業を通じて有機養鶏の実践で必要となる飼育技術や、温度管理など問題が発生した際の対応方法を着実に向上させてきた。これまでの経験や学びを活かし養鶏設備を整え、生産性のばらつきを改善し、安定的に出荷し経営が成立する体制の構築を図る。また、生産物の品質の高さをアピールし、飲食店や卸業者への効果的な広報を進めていくとともに、他の生産者と共同して近江しゃものブランディング化と普及推進を進め販路の拡大を行っていく。

2) これからの農業を支える人材育成

(c) 有機農業研修のための実践圃場の整備・研修員受け入れ

これまでのイベント実施経験や人材ネットワークを活用し、田植えイベントや稲刈りイベントを切り口に、有機農業の普及や生物多様性を持続的に維持していく人材の育成、新規就農希望者へのネットワークの提供を行い、有機農業を推進・支援する社会的環境の構築を図る。また、本会とのつながりの深いインド・ブッダガヤ市の若手農業従事者を本邦に招聘し、日本での有機農業の実践や技術を学ぶ研修機会を提供することを検討中である。

(d) 有機農業の技術や知識を普及するためのネットワークの構築

2018年3月よりインド北東部のブッダガヤ市にて本会が実施している有機農業普及事業において、これまでの滋賀県東近江市の事業を通じて獲得したネットワークを用いて技術指導を行う専門家をインド・ブッダガヤに派遣する予定である。日本だけではなく途上国においても有機農業の普及促進を支援し、安心安全な食の生産を行う農業従事者の育成を行うことにより、日本とインドを繋ぐ有機農業普及ネットワークの構築を図ると共に日本とインドの交流を深め人材育成を行う予定である。

3) 環境保全・生物多様性保全の促進

(e) 生きものや土壌などのデータ採取による生物多様性の調査

本年度実施した生きもの観察会において、有機農業を実践する圃場にて絶滅危惧種の生息が確認できた。また、生きもの調査は実地体験を通じて子どもたちやイベント参加者の環境意識の啓発を促すことができるため、2019年度も引き続き田植えや稲刈りのイベント時にも生きもの観察を実施し、年間を通じた生きものの生態調査を行い生物多様性の重層性を調査するとともに、生物多様性保全意識の普及を図る。

以上

【公4】緊急災害援助事業

事業名	ヨルダン・ザルカ県におけるコミュニティセンター運営及びザアタリ・キャンプにおける子ども向け心理社会的ケア事業（略称：シリア人道支援）
事業地	ヨルダン・ハシェミット王国ザルカ県及びマフラック県
活動内容詳細	
2018年6月に完了したシリア JPF 第6期事業について詳細を報告する。	
<p>【事業の成果】</p> <p>ザルカ県のホストコミュニティにおいて、シリア難民及びヨルダン人貧困層を対象に、社会的弱者層のニーズに応じた支援を提供するコミュニティセンターの運営と機能拡充に取り組んだ。生活物資支援においては、物資面から生活困窮の緩和に寄与した他、コミュニティスペースにおける心身のケア、エンパワーメント、啓発等の活動とカウンセリングによるメンタルヘルスケアの提供を通じて、精神保健及び生活能力の向上を支援した。本事業全体を通して、シリア難民とヨルダン人双方に対して包括的な支援を実施すると同時に、共に活動できる環境を提供することにより、コミュニティにおける相互理解の促進に寄与した。また、実施に際しては、周辺地域で活動する現地団体や関係省庁との連携を図り、リソースやノウハウの共有、並びに支援提供者の知識向上に繋がった。ザアタリ・キャンプにおいては、子ども向けに心理社会的ケアの提供を通じて、キャンプ内で不足している心のケアに対応した。</p>	
<p>【コンポーネント1：生活物資支援】</p> <p>ザルカ県に滞在するシリア難民 6,804 人及びヨルダン人貧困層 2,916 人に対して、提携するスーパーマーケットで使用可能な食糧バウチャーを配布し、彼らの生活困窮の緩和に寄与した。また、ヨルダン人貧困層に対しても支援を提供することで、支援の偏重を最小化し、コミュニティにおける軋轢や負担の軽減に努めた。市場経済が機能しているヨルダンにおいて、物資ではなくバウチャーによる支援は、日常的に高いニーズのある食糧支援を実行する上でより効果的であり、且つ裨益者に選択肢を与えることで尊厳の確保に繋がったと言える。</p>	
計画	実績
食糧バウチャーを配布したシリア難民の数 (6,804 人)	計画通り実施 (6,804 人)
食糧バウチャーを配布したヨルダン人貧困層の数 (2,916 人)	計画通り実施 (2,916 人)
シリア難民への各世帯 1 人あたり給付額計 (30JD)	計画通り実施 (30JD)
ヨルダン人貧困層への各世帯 1 人あたり給付額計 (20JD)	ヨルダン人貧困層への各世帯 1 人あたり給付額計 (30JD)
<p>【コンポーネント2：コミュニティスペースの提供】</p> <p>○子ども向けプログラム：</p>	

ザルカ市及びザアタリ・キャンプにおいて、シリア難民及びヨルダン人貧困層の子ども計 196 人が心理社会的ワークショップに参加し、描画、粘土細工、スポーツ、演劇等の活動を通じて、段階的に自己表現を学びながら、協調性の向上やストレスの発散といった心理社会的な発達や回復に取り組んだ。また、ザルカ市近郊のシリア難民及びヨルダン人貧困層の子ども計 194 人がスポーツ・レクリエーションに参加し、サッカーやバスケットボール等のチームスポーツやグループでのレクリエーション活動を通じて、安全な環境で思い切り身体を動かすことによるストレスの発散や自己解放の促進を図ると同時に、チームワークやリーダーシップを学ぶ機会を提供し、子どもたちの心身の健康増進に寄与した。

○エンパワーメントプログラム：

ザルカ県に滞在するシリア難民及びヨルダン人貧困層の成人・青少年を対象に、手工芸教室及び英語教室、PC 教室を開催し、計 759 人の男女が参加した。また、ワークショップ参加者の中で、高い向上意欲と技術を有する女性たちが、経済的、精神的な自立を目的に、2014 年 2 月より、製作チーム(JORIA)としての活動を自主的に開始しており、この活動を支援した。本事業期間においては、計 37 人の女性が平均 1 人当たり 357JD(約 5 万 6 千円)の売り上げを記録した。

○啓発講座、交流プログラム：

ザルカ県に滞在するシリア難民及びヨルダン人貧困層を対象に、シリア難民の教育や就労に関する情報や、未亡人や親子、夫婦等、特別な支援・情報を必要とするグループへの有効な情報等、生活に有用な情報を提供する啓発講座を開催し、計 869 人が参加した。また、コミュニティセンターの利用者同士が気軽に集まって交流を図れるよう、女性たちの間でニーズの高いエクササイズ教室、セルフディフェンス教室、石鹸作り教室、クリーム作り教室、料理教室に加えて、男性から要望のあった理髪教室等、裨益者のニーズに基づいてプログラムを企画し、計 1,801 人が参加した。

計画	実績
【子ども向けプログラム】	
プログラムに参加した子どもの数 (360 人) ・心理社会的ワークショップ (180 人) ・スポーツプログラム (180 人)	プログラムに参加した子どもの数 (390 人) ・心理社会的ワークショップ (196 人) ・スポーツプログラム (194 人)
心理面の状態を改善 (参加者の過半数)	心理面の状態を改善 (参加者の 8 割)
【エンパワーメントプログラム】	
プログラムに参加した男女の数 (348 人) ・手工芸教室、英語教室、PC 教室 (318 人) ・生計向上支援(製作チーム JORIA) (30 人)	プログラムに参加した男女の数 (796 人) ・手工芸教室、英語教室、PC 教室 (759 人) ・生計向上支援(製作チーム JORIA) (37 人)
担当講師が各教室において参加者の能力向上を確認 (参加者の 7 割以上)	担当講師が各教室において参加者の能力向上を確認 (参加者の 8 割)
製作チーム JORIA の 1 人あたりの年間平均売り上げ (200JD)	製作チーム JORIA の 1 人あたりの年間平均売り上げ (357JD)
【啓発講座・交流プログラム】	

啓発講座もしくは交流プログラムに参加した数 (1,556 人) ・啓発講座 (300 人) ・交流プログラム (1,256 人)	啓発講座もしくは交流プログラムに参加した数 (2,670 人) ・啓発講座 (869 人) ・交流プログラム (1,801 人)
各プログラムの内容に対する理解もしくは満足度の確認 (参加者の 7 割以上)	各プログラムの内容に対する理解もしくは満足度の確認 (参加者の 8 割)

【コンポーネント 3：カウンセリングサービスの提供】

○カウンセリングサービス：
ザルカ県に滞在するシリア難民及びヨルダン人貧困層延べ 2,216 人に対して、精神科医、臨床心理士、ソーシャル・ワーカーによるカウンセリングサービス及び向精神薬処方を行い、メンタルヘルスの向上に取り組んだ。

○キャパシティ・ビルディングワークショップ：
アンマン県とザルカ県の保健省の施設において、延べ 54 人のメンタルヘルスケア従事者に対し、精神保健分野における知識の強化、情報の共有、意識の啓発に取り組んだ。

計画	実績
【カウンセリングサービス】	
カウンセリングを受けるシリア難民及びヨルダン人の数 (1,500 人)	カウンセリングを受けるシリア難民及びヨルダン人の数 (2,216 人)
【キャパシティ・ビルディングワークショップ】	
能力強化のワークショップの開催 (2 回)	計画通り実施 (2 回)
能力強化のワークショップに参加するメンタルヘルスケア従事者数 (50 人)	能力強化のワークショップに参加するメンタルヘルスケア従事者数 (54 人)

以上

【公 6】 広報啓発事業

事業名	広報啓発事業
事業地	日本国内
活動内容詳細	
会誌 会誌「リリーフ・アクション」56号、2018年6月15日発行 3,500部 会誌「リリーフ・アクション」57号、2018年12月15日発行 2,500部	
インターネットメディア	

ウェブサイト 年間閲覧数 約 38,000 ページビュー (表示された回数)

フェイスブック ページを「いいね！」してくれた人数合計 1,571 人

イベント (開催日、イベント名など)

国際協力イベントへの参加

	実施日	内容	開催地
1	2018年9月29日	グローバルフェスタ JAPAN2018 に大豊が NGO 相談員として参加	東京都
2	2018年11月17日、18日	一般社団法人 リノベーション住宅推進協議会が主催する「リノベーションエキスポ京都」にて、NICCO が実施したフィリピンでの台風被災者の住宅再建やアフリカでのエコサントイレ建設事業についてブースを出展して解説した。	京都府
3	2018年11月23日	きょうと地域創生府民会議が主催する「平成30年度あすの Kyoto・地域創生フェスタ」にブースを出展し、シリア難民支援事業について解説・広報した。	京都府
4	2018年11月25日	NICCO も所属している「清水寺で世界を語る実行委員会」が主催する「第6回清水寺で世界を語る」にて、ブースを出展しシリア難民支援事業について広報したほか、円通殿にて「国際協力 NGO キャリアセミナー」を開催し、大豊がパネラーとして参加した。	京都府
5	2018年12月8日	公益財団法人京都市ユースサービス協会 (伏見青少年活動センター) が主催する「ふしみん祭り 2018」に、ブースを出展し、シリア難民支援事業やエコサントイレについて広報したほか、国際協力 NGO でのキャリアについてのトークセッションで大豊がパネラーとして参加し、NGO で働くやりがいなどについて話した。	京都府
6	2018年12月24日	ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 運営委員会、関西 NGO 協議会が主催する「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth ～高校生のための国際交流・国際協力 EXPO 2018～」に小西が NGO 相談員として参加し、高校生からの相談に対応した。	大阪府
7	2019年1月12日	環境省近畿地方環境事務所、近畿地方 ESD 活動支援センターが主催する「地域資源を活用して子どもたちの学ぶ力を育てる授業をつくろう」にブースを出展し、教育関係者と意見交換などを行った。	大阪府
8	2019年2月2日	ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会が主催する「第26回ワン・ワールド・フェスティバル」に大豊、岡田が NGO 相談員として参加し、市民から国際協力に関する相談に対応した。	大阪府

講演

	実施日	内容	開催地
1	2018年7月5日	国士舘大学にて、小野理事長が国際協力について講演した。	東京都
2	2018年7月11日	京都外国語大学にて、北垣がシリア難民支援事業について、講演した。	京都府
3	2018年8月31日	JICA 関西主催「学生のための国際理解ワークショップ実践セミナー」に岡田が講師として参加	京都府
4	2018年10月20日	公益財団法人京都市環境保全活動推進協会主催 IPCC 総会京都市開催記念 京都宣言発信リレー事業「気候変動から見たSDGs～世界を変える市民のチカラ～」に大豊がパネラーとして参加	京都府
5	2018年10月11日	クラーク高校の生徒と京都本部とヨルダンのザルカセンターとをテレビ電話でつないで講演	
6	2018年10月15日～19日	第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）に小野理事長、岡田、北垣とマラウイからオーブリー・チムワザさん、ケニアからジョアンさんが参加	茨城県
7	2018年10月24日	京都大学の学生サークル「ウガンダインターンシップ CrePro」が主催する「国際協力×Career～キャリアとしての国際協力を身近に～」に大豊がパネラーとして参加	京都府
8	2018年10月26日	京都洛西ロータリークラブの例会にて岡田が東南アジアでのNICCOの活動について講演を行った。	京都府
9	2018年12月12日	龍谷大学にて大豊がNICCOのアフリカでの活動について講演した。	京都府
10	2019年1月9日	龍谷大学にて大豊が日本のNGOの組織運営について講演した。	京都府
11	2019年1月16日	京都文教大学にて、岡田が国際協力論について、講演した。	京都府
12	2019年1月16日	京都洛陽ライオンズクラブの例会にて、大豊がNICCOの活動について講演した。	京都府
13	2019年1月27日	京都市動物園が毎月開催している「夜の図書館カフェDEトーク」に大豊が講師として招かれ、アフリカでの活動について、環境保全の視点から講演した	京都府
14	2019年2月15日	京都洛西ロータリークラブの例会にて岡田が「社会奉仕と国際協力の関わり」について講演を行った。	京都府
15	2019年3月29日	京都CSR研究会にて、岡田が「CSRの推進役としてのNGO」をテーマに講演した。	京都府

自主イベント

	実施日	内容	開催地
1	2018年5月12日	滋賀県東近江市の田んぼで田植えイベントを開催した。	滋賀県
2	2018年8月19日	滋賀県東近江市の田んぼにて、生き物観察会を開催した。	滋賀県
3	2018年10月20日	滋賀県東近江市の田んぼで稲刈りイベントを開催した。	滋賀県
4	2019年2月7日	インターン生の信原が企画し NICCO が主催するワークショップ「大学生がヨルダンで学んだイスラム教の真の姿」を開催し、大学生を中心にシリア難民支援事業について広報した。	京都府

後援・協力イベント

	実施日	内容	開催地
1	2018年5月27日	NICCO が運営協力する「第32回京都・チャリティ・ファンラン」が開催され、小野理事長が参加ランナーに NICCO の活動を広報した。	京都府
2	2018年10月13日	NICCO が後援する「第8回 NICCO チャリティ・ラン鴨川」を開催し、ランナーに対してアフリカの事業について紹介した。	京都府
3	2019年2月20日 ～25日	NICCO が後援する第29回チャリティ・オークション「芸術家と文化人の作品展」が開催され、運営の協力や事業の広報を行った。	京都府

マスコミ懇親会

開催なし。

プレスリリース

年間件数 2件発行

マスメディア実績

テレビ

2019年2月20日 NHK 京都放送局「ニュース 630 京いちにち」にて、第29回チャリティ・オークション「芸術家と文化人の作品展」の紹介と NICCO の活動について、インタビューを受け放送された。

ラジオ

2018年9月9日 αステーション 「Makoto's Lovers」にて、インターン生がスタジオ出演し、NICCO チャリティ・ラン鴨川の告知と NICCO の活動について広報を行った。

新聞

2018年4月23日付 読売新聞 「きょう人十色」にてシリア人道支援事業について、磯田唯子がインタビューを受け、記事が掲載された。

2018年5月28日付 京都新聞 市民欄にて、第32回京都チャリティ・ファンランの記事が掲載された。

2018年6月8日付 読売新聞 「イチオシ！」にて、ヨルダンの自立支援とオリーブオイル生産農家支援について、小野了代理事長がインタビューを受け、記事が掲載された。

2018年11月26日 京都新聞 市民欄にて、NICCOが運営団体として参加している「清水寺で世界を語る」イベントについて記事が掲載された。

インターン研修

受け入れ人数 8名

上記のうち、海外研修に派遣した人数 3名

「外務省主催 NGO インターン・プログラム」受け入れ団体に採用され、1名を受け入れ、国内・海外研修を実施した。

以上

以上